



私の紙ングアウト 荻野アノチ

ブランド品とは縁のない暮らしをしている。この前も着ていたトレーナーを誉められて、調子に乗って二千九百円と値段をハラしてしまった。こんな私が、ぜひ手に入れたいと願う、夢の特注品がある。

シャネルの原稿用紙。ヴィトンでもいい。ヴィトンならクリーム色の厚手の紙に、セピアの罫目を入れる。四隅には、Lのロゴが散っている。シャネルは黒と金の組み合わせがいい。鉛筆で書いても闇夜のガラスになるから、銀色のサインペンで華麗に「執筆」する。

一、二行で行き詰まるとは、シャネルマーク入りの原稿用紙をクシャクシャ、ポイ。かつこいい、かつこよすぎる!!! ただし問題が、ひとつある。世界でひとつの特注品は、私の原稿料より

はるかに高価な一枚となる。ということとは、書けば書くほどソンをする。

ワープロか手書きかと、よく聞かれる。パソコン、ワープロ専用機、手書きを使い分けている。勤めがあり、地方の仕事も多いゆえ、書齋でゆっくり、とはいかない。コレを書いている今現在、病院の廊下にいる。

「この前二十四時間ホルター心電図の検査したばかりなのに、なんでまた心電図取らなならんねん?」

傍らで母親が目を三角にしている。「私に聞かれたって分かんないわよ。」

お医者様に聞いてよ。 などといつやり取りの合間の執筆は、パソコンだとキーを誤操作して、書きかけの文章がフツ飛びかねない。

いちよまえにノート型パソコンを持ち歩いた時期もある。軽量化はますます進んで、たった二キロのものまで出た。それでも原稿用紙五十枚綴りにはかなわない、という当たり前に気付いて以来、バッグの中にはマ判のものを常備している。たとえ出先で地震にあって閉じ込められようが、ハイジヤックの品質になることが、コレとペンさえあれば大丈夫、という妙な安心感がある。



荻野アノチ(おぎの・あんな) 1956年横浜生まれ。慶應義塾大学文学研究科博士課程修了、現在同大学文学部教授。91年、「背負い水」で第105回芥川賞を受賞。02年、「ホラ吹きアノチの冒険」で第53回読売文学賞を受賞。著書に「ラブレール」など。

「ここまで書いたところで母の診察があり、原稿用紙をしまったバッグから、今度は手帳を取り出す。医師によるレントゲン写真の解説をメモしていく。

「横隔膜が平らでしょ。肺気腫で肺が膨張したためです。本来はドーム型なんですよ。」

煙草はせめて二日五本以下に、と言われて頷く母であるが、帰りのタクシーで、最初の二服に火をつけると、経験上知っている。

母の血圧・脈拍を記した同じ手帳の前のページには、「小原庄助さん」とある。

マリノ(ニコチンのリキユール) アボガード(卵のリキユール) シャンパン、グルナデンシロップ 少々

行きつけのバーで、いつも「お題」を出してはオリジナルカクテルを作ってもらっている。そのレシピである。ちなみに「小原庄助さん」は「脱力系」。ひと口嚼ればゴクフク気分、仕事する気が完璧に失せる。今夜は何にしようかと、そつと手帳を撫でてみた。

PAPER COLUMN Vol.1

古紙利用率は世界のトップクラス!

この『週刊文春』が創刊された1959年、古紙の利用率は27.1%でした。それが、2002年には59.6%と世界でもトップクラスの水準にまで達しました。

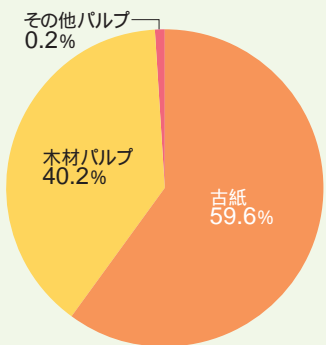
古紙利用率を高められた理由は2つあります。

第1に分別と利用の向上です。回収時にきちんと分別されるため、リサイクル効率がアップ。再生紙への理解も深まり、積極的に使用されるようになりました。

第2に古紙再生技術の向上です。以前は背のりが原因で使いにくかった雑誌古紙の用途も広がりました。今では、ビール瓶のラベルや電車の切符も、再利用できています。

リサイクルに高い意識を持つみなさんのご協力で、古紙利用率は着実に伸び続けているのです。

日本の製紙原料構成比 (2002年)



資料:経済産業省「紙・パルプ統計」

